

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：37502

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26870427

研究課題名(和文) インドにおける児童養護施設出身の若者の複数準拠集団の相互補完的役割に関する研究

研究課題名(英文) Mutually complementary roles of multiple reference groups for youths brought up in Children's Home in India

研究代表者

針塚 瑞樹 (HARIZUKA, MIZUKI)

別府大学・文学部・講師

研究者番号：70628271

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、インドの児童養護施設出身の若者たちの有する複数の準拠集団が、若者の選択・決定において相互に補完的な役割を担っていることについて、次の点を明らかにした。

- 1) 若者たちは、都市で児童養護施設を基盤として築いた社会関係に基づき、施設出身者のグループ、施設職員、故郷尾家族といった複数の準拠集団を有し、教育、就労、結婚に関する選択・決定の際に相談をしたり、支援を得ていた。
- 2) 若者たちは施設から自立した後、仕事や結婚について施設出身者、施設職員を準拠集団として、具体的な選択・決定をする場合が多いが、故郷の家族の教育や就労については、積極的に助言や支援を行っている場合が少なくなかった。

研究成果の概要(英文)：Case studies of this research show mutually complementary roles of multiple reference groups for youths rehabilitated from Children's Home as following two points.

1. Youths had multiple reference groups based on their social relationship which they developed when they are in children's home. They got advice and help from suitable reference groups depend on the character of the matter. Researcher focused on education, work and marriage matter.
2. After rehabilitated from Children's Home, most of youths people re-constructed relationship with families they had in hometown. They have tendency to choose and decide about their matters by themselves with advice and help from refererence groups in urban areas where they live, but they are willing to give advice and support for their families in rural areas, especially in the cases of education, work and marriage matter of siblings. They became a important member of reference group for their family member.

研究分野：教育人類学

キーワード：インド 児童養護施設 NGO 若者 準拠集団 教育 仕事 結婚

### 1. 研究開始当初の背景

申請者は、インド都市社会に生きるストリーチルドレンの主体性の研究を行うために、子どもの「自己決定」について、子どもと NGO の関係性に着目して長期的な参与観察を行ってきた。おとなの保護がない環境で自立しているストリーチルドレンが、子どもを「保護」の客体かつ「自律」の主体とみなす「子どもの権利」の理念に基づき活動を行う NGO との間に、教育を与える・受けるという関係性を構築する過程を分析し、子どもが NGO と信頼関係を築く中で自由な選択・決定を制限されつつも NGO の保護を受け入れるようになっていること、やがては NGO の活動を通して「教育」と「自己決定」の価値を理解し、NGO と共同的な選択・決定を行うことを志向するようになっていることを明らかにした。

申請者はその後、NGO の児童養護施設を出て、自立して生活する若者の共同の関係性の構築過程について調査を行ってきた。施設で暮らした若者の多くは、施設を出てからも教育や就職の面で施設のサポートを受けており、その多くが家族に仕送りをする、家族を都市に呼び寄せるなど、家出という形で一度は途絶えた家族との関係性を再構築していた。さらに、これらの若者の多くは都市で働き、家族の中で最も経済力を得て、故郷にいる兄弟姉妹の教育や就職、結婚について、リーダー的役割を担っていることが少なくないことが明らかとなった。

### 2. 研究の目的

1990年代からインド政府は NGO と連携して、すべての子どもに対する福祉と教育の保障に取り組んでいる。その結果、労働や路上生活を経験したストリートチルドレンとよばれる子どもたちのなかで、NGO の児童養護施設で暮らした経験のある者は少ない。

本研究は、インドの児童養護施設出身の若者が有する複数の準拠集団の特徴と、若者が共同的关系性を深化・拡張するうえで複数の準拠集団がもつ相互補完的役割を明らかにすることを目的とした。子どもの頃に家族という共同体を離れ、児童養護施設という共同体に接触した若者の教育、仕事、結婚における選択・決定の場面に注目して、若者にとっての共同体的存在の成立条件とその性格を検討した。

### 3. 研究の方法

本研究は、主にインドにおける現地調査においてデータ収集を行った。申請者は、研究の拠点としているデリーの NGO に 2003 年から毎年訪問しており、インフォーマントの若者たちや NGO 施設職員とは、長期間にわたって関係を築いてきているため、彼らの家族や友人にインタビュー調査を行うこと

が可能であった。また、NGO との関係が途絶えた若者とも、個人的に連絡先を交換していた。連絡先が分からなかった若者とは、特定の NGO 職員や同じ NGO 出身者を通じてコンタクトを取ることが可能であった。

調査の主なインフォーマントである若者の多くはデリー在住であるが、仕事や結婚のために国内外の他の地域に住んでいる者もいた。そのため、現地調査は、若者の多くが居住するデリー、若者の出身地であるビハール州やベンガル州を含め、若者が就職や結婚のために居住している地域にて行う予定であったが、今回の調査においては、デリーに在住の若者を中心として、デリーの戻ってきた他州に住んだ経験のある若者、あるいは他州にいる若者に対しては電話でインタビューを行った。

具体的には 2014 年 4 月～2017 年 3 月までの間、デリーにて 5 回の現地調査を行った。具体的な調査の概要は以下の通りである。

2015 年 3 月

デリーにて、NGO の児童養護施設の職員、出身者に対するインタビュー調査。

2015 年 8 月

デリーにて、児童養護施設出身者に対するインタビュー調査。工学系私立大学出身者に対するインタビュー調査。

2016 年 3 月

デリーにて児童養護施設出身者とその家族に対するインタビュー調査。

2016 年 8 月

デリーにて、児童養護施設出身者に対する調査。工学系私立大学出身者に対するインタビュー調査。

2017 年 3 月

デリーにて、児童養護施設出身者に対する調査。

### 4. 研究成果

本研究においては、一次的・長期的に NGO 施設の支援を受けた若者を中心に、彼らの教育、仕事、結婚に関連する選択・決定についてインタビュー調査を行い、語りに出てくる児童養護施設出身者・職員、家族、同居人など彼らにとって準拠集団となっている人々との関係性について詳細なインタビューを行った。そのうえで、若者が共同的关系性をもつ複数の個人または集団が、若者の選択・決定の準拠集団として果たす相互補完的役割と、それにとまなう若者の共同的关系性の深化・拡張のありようについて分析を行った。

#### 若者の、あるいは若者の家族の結婚における社会関係

若者が自らの結婚に関して行なった選択・決定について、インタビューを行い、相談をした、支援を受けた相手が誰であるのか、どのような関係性であるのかを明らかにした。インドの結婚は、個人の選択・決定とい

うよりも、家族・親族の関わる出来事として理解されている（Singh2010）ため、結婚に関して誰が何について決定しているのかに焦点をあてて明らかにした。

インドでは結婚は一般的に家族・親族の関わる事柄であるため、相手の選択にも家族が関わる人が多いなか、若者たちのほとんどが恋愛結婚をしており、結婚相手の選択は若者自身によるものであることがほとんどであった。結婚する相手は、同じ児童養護施設出身者、仕事を通して知り合った相手がほとんどであった。数例は児童養護施設のボランティアである外国人と結婚した事例もあった。そのため、結婚に関わる婚約や披露宴等の儀礼は都市で行うことが多く、児童養護施設の職員、出身者が儀礼の際の家族・親族の役割を担っている場合が多かった。故郷の家族を儀礼に呼ぶこともあり、なかには都市と故郷の農村と二か所で儀礼を行う者もいた。

若者たちの結婚で特徴的なのは、結婚の相手、時期、儀礼などを主として若者自身と相手、相手の家族の間で決めていることである。インドでは、結婚に関することにおける家族の考えの尊重、介入は一般的であるが、都市での生活が長く、家族のなかで最も学歴や収入が高い若者たちの選択・決定は家族からも尊重されていた。しかし、彼らの多くは家族から「結婚をするように」というプレッシャーを受けており、その意味では結婚に関する心理的な後押しを家族が行っていた。

若者たちの故郷の兄弟姉妹の結婚に関しては、若者たちが助言や支援を行っていることが多かった。若者たちには多くの場合経済的な支援が期待されており、結婚に要する資金を出すことに責任を感じている場合が少なくなかった。

児童養護施設出身の若者たちの結婚は、インドで結婚の際に一般的に考慮される、カーストや宗教に縛られないインターカースト・インターリリジョンマリッジであるケースが多かった。そうした結婚は一般的に家族や親族の反対に合うことも少なくないが、彼・彼女らの場合、児童養護施設の職員や出身者に相談をしてアドバイスをもらえるだけでなく、結婚に関する実質的な準備、儀礼においても職員、出身者を頼って支援を得ることが多かった。施設の職員、出身者の仲間は若者たちにとって、インド社会の一般的な結婚における家族・親族の役割を果たしているといえる。

また、故郷の家族は都市での生活の長い彼らの結婚に反対をすることはほとんどなかったが、儀礼の際には参加するなど家族としての役割を果たしていた。また、故郷の家族は「結婚をしてほしい」ということを若者たちに伝えることで、結婚をするという彼らの決定に関わっているといえる。これらのことを総合的に考えると、主として若者たちの結婚において、児童養護施設の職員、児童養護施設出身者の友人が、恋愛結婚に関する実質

的な助言や支援をするという意味で準拠集団となっているのに対して、故郷の家族は「結婚をする」という規範について若者に意識付けをもたらすという意味をもっており、児童養護施設職員、施設出身者仲間、故郷の家族は相互補完的に役割を果たしていたといえる。

### 児童養護施設出身の若者と私立大学を卒業した若者の社会関係の比較

報告者は、NGOの児童養護施設出身者の若者2名が進学したインド南部の工学系私立大学に通う男子学生を対象に、進路選択に関わる語りを分析し彼らの社会関係について検討を行ったことがある（針塚 2013）。中等教育修了段階における進路選択は、施設出身者が施設職員や施設を通じて知り合った大人の助言を受けながらも、自分で選択・決定を行ったという意識をもっていたのに対して、大学生の多くは、成績と周囲の期待に基づく既定路線を進んだという感覚をもち、自分で進路を選択したという意識が相対的に希薄であった。

本研究では、児童養護施設出身の若者の有する社会関係との比較を目的として、進路選択に関する調査対象者であった若者の中から、大学を卒業し上級公務員職を目指しデリーで浪人生活を送る若者たちを対象として、彼らの大学卒業後の進路選択や就職、進学に関わる意識と社会関係に関するインタビューを行った。これら浪人生活を送る若者たちの多くがビハール州、ウッタル・プラデシュ州といった北部農村州の出身でデリー在住であるという点では、児童養護施設出身者と同じであったが、家族の経済状況、学歴、現在の仕事の点は大きく異なっていた。

上級公務員職を目指し浪人生活を送る若者たちは、予備校に通う学費や生活費を家族あるいは家族によるローンに頼っていた。そのため、浪人生活を続けるか否かという選択については、自らの意思によるというのはもちろんであるが、家族の意向によって大きく左右されていた。試験や都市での浪人生活に必要な情報は予備校や浪人仲間から得ており、仲間と共同生活をする若者もいたが、彼らの多くは毎日あるいは数日おきに家族と電話でコミュニケーションをとっていた。宗教的な祭日や長期休暇になると、彼らは帰省をする、もしくはデリーに在住する親族宅を訪問し過ごしている場合が多く、自宅にいる場合でも仲間と一緒に祝うといったことはほとんどなかった。

児童養護施設出身者の中にも、施設から自立した後に教育を受け続ける者は少なかったが、経済的な支援を家族から得ることはなく、働いて貯めたお金、もしくは自分が過ごしていた施設を通じて得た奨学金などを基としていた。彼らのほとんどは、通信制教育を受けており働きながら学んでいた。彼らの多くは働き初めてからしばらくの間は、同じ

施設出身者と共同生活を送っていた。また、多くの出身者のグループが複数の地域において近居していた。施設出身者同士の同居は、結婚や仕事の都合による転居、仲たがいににより解消されることもあったが、そうした場合に、別の同じ施設出身者と同居を開始することも少なくなかった。彼らは同居生活のなかで、仕事に関する悩みや新しい事業の計画などを日常的に話しあっていた。また、施設出身者同士の同居では、宗教的儀礼や誕生日を一緒に祝うといったことが日常的にみられた。祝い事に近隣に同居する施設出身者の別のグループや施設職員を招くといったこともなされていた。

結婚した施設出身者の若者の場合、家族が関わる祭事や出事の場合には、妻方は家族が参加し、夫である若者たちの側は施設出身者や施設職員が参加しているといった場合が多かった。

例えば、ある施設出身の若者に子どもが生まれた場合には、恋愛結婚をした相手である妻方は病院に両親と兄が来ているのに対して、夫である若者側は複数の施設出身者が訪問していた。この際生まれた赤ん坊に健康上の問題があり、そのときに父親である若者は施設の職員に相談をして赤ん坊の搬送先を決めていた。また、別の事例では、結婚記念日のパーティーに妻方は、母親、兄が招待されたのに対して、夫である施設出身者側には、施設のトラスティと施設出身者、施設のボランティアらが招待された。

上級公務員職に就くことを目指す若者たちと施設出身者である若者たちでは、数人ずつのグループで共同生活を送っていること、教育、仕事などの悩みを相談しあい、情報を交換しあっているという点は共通していた。インド都市部で生活する若者として、日常的に衣食住を共にして、頻りにコミュニケーションを行っている点において両者の間に違いはないといえる。しかし、宗教的な祭事や娯楽といった場面では前者は故郷の家族やデリーにいる親族と主に過ごしているのに対して、後者は同居する施設出身者同士と一緒に過ごすことも多かった。

また、教育や仕事に関する選択・決定の際に、前者は大きく家族の意向を考慮しているのに対して、後者ではそうしたことはほとんど見られなかった。両者ともに、故郷の家族は若者たちが生きる都市社会の現状に通じておらず、若者たちが相談をして具体的なアドバイスを求めることはできなかったが、前者の生活は故郷の家族によって支えられており、後者の生活は故郷の家族を支えているといった違いがあった。

### 共同的关系性の構築における複数の準拠集団の相互補完的な機能

児童養護施設出身の若者たちは、施設から自立した後、施設職員や施設出身者によるネットワークを基盤として、共同的关系性を広

張しているといえる。その例の一つが、故郷の家族との関係性である。故郷に家族のいる若者は、施設を出た後、送金をして家族を経済的に援助するだけでなく、兄弟姉妹、親族の子どもの教育や就職を考えて、都市に呼び寄せ同居する、一緒にビジネスを始めるなどしている事例が少なくない。また、故郷の兄弟姉妹の結婚についても経済的支援を行っている。

今回の調査では、施設出身の若者らが施設出身者や職員との共同的关系性を基盤として、さらに家族との間に共同的关系性を再構築し、複数の準拠集団として若者の結婚において相互補完的に機能しているという仮説が生成された。若者たちはさらに結婚によって、妻方の家族・親族や友人との間に共同的关系性を拡張していた。これまでに結婚した施設出身の若者のほとんどが都市で恋愛結婚をしているが、その場合、結婚という規範の意識付けという点では故郷の家族が準拠集団となり、結婚の相手、時期、儀礼などの選択・決定においては施設職員や施設出身者が準拠集団となっていることが多かった。彼らは自由恋愛の末に結婚相手を選択しており、彼らの結婚相手の女性が同じ施設出身者の場合、互いの両親からの反対は少ないが、仕事を通じて知りあった相手といった場合には、妻方の家族・親族と若者らの故郷の家族・親族の間では学歴や社会的地位といった点で格差があった。そうした結婚に向けての障壁は、学歴や社会的地位のある施設関係者の支援によって取り除かれることを若者たち自身が知っており、施設関係者との関係性があることや実際の介入を頼りにしていた。

故郷の家族は若者たちの結婚への動機づけとして影響している可能性が高いが、こうした動機づけとなる要因は複数あると考えられる。若者たちのほとんどは故郷の家族から結婚することを期待され、プレッシャーを受けているが、家族がいないが結婚している者、家族からのプレッシャーを受けながらも結婚していない者もいる。こうした少数の事例についても、彼らの選択・決定の経緯を明らかにしていく必要がある。

また、彼らの仕事に関する選択・決定の場面については、彼らが日常的に同居や近居をしている施設出身者仲間に相談をし、アドバイスを得ていることが明らかになった。同世代の仲間とのヨコのつながりは、インド都市部の若者に広く共通していると考えられるが、施設出身の若者たちに特徴的であるのは、子ども時代からお互いを知っていることと、祭事や娯楽も共に過ごすような関係性を保持していることである。その結果、公私にわたり時間と空間を共にする共同的关系性を持続している事例が少なくない。

施設出身の若者にとって、施設出身者同士、施設職員との共同的关系性は施設から自立して時間が経つにつれて、彼らの仕事におけ

る社会関係の拡大、結婚による社会関係の拡大により変容している面もある。しかし、中等教育を修了し 18 歳前後で施設から自立してからの数年間の経済的に不安定かつ、社会関係も限定された期間においては、施設出身者の複数のグループと施設職員、故郷の家族といった複数の準拠集団が相互補完的に若者たちの公私にわたる生活を物理的・心理的に支えていると考えられる。

今後は施設出身者の社会関係の変化について、施設出身者間の関係、施設出身者のグループ間の関係、施設職員との関係がどのように変化していくのかを継続的に調査すると同時に、児童養護施設の運営あり方の変化が施設の子どもと職員、子ども同士の関係性にどのような影響を与えているのかについても調査を行いたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

針塚瑞樹「ノンエリート高学歴者の職業アスピレーション 工学系私立大学卒業者の事例」『アジ研ワールドトレンド』アジア経済研究所、査読無、2017、8-11

針塚瑞樹「「家族」のあり方と子どもの幸福感 インド都市社会に生きる子どもたちの事例から」『教育と医学』、No.755、査読無、2016、72-79

針塚瑞樹「第2章 インド児童養護施設出身のキャリア形成における教育の役割

デリー、NGO施設 SBTの若者の事例」『「学校から仕事へ インドにおける教育と雇用のリンケージ」研究会中間報告書』アジア経済研究所、査読無、2014

[学会発表](計 7件)

針塚瑞樹、『学校化される子ども・若者の身体 アジアの国々との比較から』日本子ども社会学会第 23 回大会、テーマセッションファシリテーター2016 年 6 月 4 日(於：琉球大学)

針塚瑞樹、『「学校化」に向かうインド』2016 年度別府大学公開講座 2016 年 10 月 22 日(於：別府大学)

針塚瑞樹「インド、デリーにおける児童養護施設出身者のキャリア形成 教育経験と社会関係に着目して」、『科学研究費(基盤研究 C: 代表佐々木宏)研究会「インドにおける非エリート高等教育機関の調査研究」』2015 年 4 月 18 日、(於：別府大学)

針塚瑞樹「学校から仕事へ 教育と雇用のリンケージ」研究会：研究経過報告と研究計画』、『アジア経済研究所「学校から仕事へ：インドにおける教育と雇用のリンケージ」研究会、2015 年 6 月 18 日、(於：アジア経済研究所)

針塚瑞樹「インドにおける若者の教育と雇用のリンケージ 共同の関係性に着目して」、『アジア経済研究所「学校から仕事へ：インドにおける教育と雇用のリンケージ」研究会、2014 年 11 月 1 日、(於：アジア経済研究所)

針塚瑞樹「インドにおける高等教育進学熱と教育格差」、『筑紫女学園大学「アジア塾第 3 回」』2014 年 10 月 16 日、(於：アクロス福岡)

針塚瑞樹「インド都市社会におけるストリートチルドレンの「自己決定」に関する研究 子どもと NGO の関係性を中心に」、『教育の境界研究会、2014 年 10 月 11 日、(於：茨木市福祉文化会館)

[図書](計 2件)

針塚瑞樹「第 6 章 インドにおけるノンフォーマル教育と NGO デリー、ストリートチルドレンを対象とした教育実践と子どもの権利」押川文子・南出和余編『「学校化」に向かう南アジア 教育と社会変容』昭和堂、2016、197-220

針塚瑞樹「補論 4 貧困層教育と NGO」『現代インド 4 台頭する新経済空間』三陽社、2015、273-276

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

[その他]  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

針塚瑞樹 (HARIZUKA, Mizuki)  
別府大学・文学部教職課程・講師  
研究者番号：70628271

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者 なし